

博士学位論文審査要旨

2020年12月26日

論文題目： 年少児が他者からの誤った情報に従い続ける傾向に関する研究
——他者に与える印象を考慮することの影響——

学位申請者： 残華 雅子

審査委員：

主 査： 心理学研究科 教授 青山 謙二郎

副 査： 心理学研究科 教授 興津 真理子

副 査： 心理学研究科 教授 及川 昌典

要 旨：

本論文は、他者から誤った情報を教えられる場面で、年少児が教えられた情報を誤っていると考えていても、他者に与える印象を考慮して、その情報に従うかを検討した。

第1章では先行研究をレビューし、繰り返し誤った情報が与えられる場面での従来の実証的研究は全て、認知的に未熟であるために情報が誤っていることに気づかないことを前提としていたことを指摘した。しかし、他者からの情報に従わないことは他者に逆らったような印象を与えかねないため、情報が誤っていると気づいていても、他者に与える印象を考慮して、情報に従うことが考えられる。本論文ではこの仮説を検証した。

第2章と第3章の実験では、2つの箱からシールを探す課題を実施し、その際に実験者は誤った情報を与えた。例えば、参加児に見えない状態で赤色の箱と青色の箱のうちの青色の箱にシールを入れた後、「シールは赤色の箱の中にあります」と述べ、2つの箱の選択をさせた。この場合、赤色の箱を開けるとシールが入っておらず不正解になる。このような試行を8試行行った。

第2章では他者から観察されない条件を設け、観察される条件と比較した。もし他者からの印象を考慮して誤った情報に従っているのであれば、他者から観察されない条件では情報に従わずに正しい選択を行うと予測される。研究1では、統制群は全ての試行を実験者が目の前にいる条件で実施した。実験群では後半4試行中の2試行で実験者がパーティションの後ろにいる状態で実施した。その結果、実験群の幼児では、実験者が目の前にいない試行で誤った情報に従う選択が少なかった。研究2では、統制群では全ての試行を保護者が観察する条件で実施した。実験群では後半では保護者から観察されなかった。その結果、後半では、実験群の方が誤った情報に従う選択が少ない傾向にあった。

第3章では、他者からの印象の重要性を操作した。研究3では、実験者から観察される条件で試行を実施した。半数では、印象が重要な条件として、実験者がいい子だと思ったら後でガチャガチャをさせてあげると教示した(いい子群)。残る半数では、印象が重要ではない条件として、後でガチャガチャをさせてあげるとだけ教示した(統制群)。その結果、予測に反して、統制群の方が誤った情報に従う傾向が見られた。

第4章では以上の結果を踏まえて、幼児が誤った情報に従い続ける傾向に、他者に与える印象を考慮することが関係している可能性が議論された。さらに、この仮説が、多くの先行研究の解釈に与える影響についても議論された。

以上のように本論文は新しい仮説を実証的に検証し重要な知見を提供している。よって、本論文は、博士(心理学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2020年12月26日

論文題目： 年少児が他者からの誤った情報に従い続ける傾向に関する研究
——他者に与える印象を考慮することの影響——

学位申請者： 残華 雅子

審査委員：

主査： 心理学研究科 教授 青山 謙二郎

副査： 心理学研究科 教授 興津 真理子

副査： 心理学研究科 教授 及川 昌典

要 旨：

論文「年少児が他者からの誤った情報に従い続ける傾向に関する研究——他者に与える印象を考慮することの影響——」を提出した学位申請者に対する総合試験を、上記審査委員3名が2020年12月26日（土曜日）午後1時10分より、同志社大学京田辺キャンパス香柏館低層棟208B室において、約2時間にわたり実施した。

総合試験の冒頭で学位申請者は論文の概要を説明し、その後審査委員から年少児が誤った情報に従う原因の特定に関する専門的質疑がなされた。学位申請者の応答はいずれも適切かつ満足できるレベルにあり、本論文の学術的価値が証明され、学位申請者の研究能力が十分であることを確認した。また、発達心理学領域における専門知識および学力を十分有することも確認した。

語学試験（英語）については、論文における文献引用で数多くの英語論文が網羅されていることに加え、その研究内容の理解や引用方法も正確かつ適切であることが確認でき、学位申請者が研究に必要な英語運用能力を十分に有していると判断した。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 年少児が他者からの誤った情報に従い続ける傾向に関する研究
——他者に与える印象を考慮することの影響——

氏 名： 残華 雅子

要 旨：

本論文では、他者から誤った情報を繰り返し与えられる場面で、年少児が教えられた情報を誤っていると考えていても、他者に与える印象を考慮することで、その情報に従うか検討を行った。

第1章では、信頼性の低い情報に幼児が従う傾向を扱った従来の研究についてレビューを行った。そして他者が繰り返し誤った情報を述べていることで、その情報の信頼性が低いと判断される場面では、幼児が特に情報に従い続けることを示した。例えば Jaswal, Croft, Setia, & Cole (2010) では色の異なる2つのカップを提示し、一方のカップにだけシールを隠した。そして実験者は、実際にはシールが入っていないカップにシールが入っているという誤った情報を述べた。例えば、赤色と青色のカップを提示しながら、実際には青色のカップにシールが入った状態で、「シールは赤色のカップの中だ」と主張した。そして参加児が赤色のカップを開けるとシールが入っておらず不正解になるというように、試行ごとに情報が誤りであったことを明らかにしながら、繰り返し8試行を行った。実験の結果、最終試行までの各試行で8割以上か8割程度の参加児が誤った情報に従っていた。

誤った情報が繰り返し教えられる場面で、なぜ幼児がその情報に従い続けるのかについて、これまでも検討されている。そして、従う要因について実験的検討を行った全ての研究は幼児が認知的に未熟であるために、情報が誤っていることに気づけず、正しいと信じて従っていることを前提として検討を行ってきた。しかし、幼児が教えられた情報に従っていても、情報が正しいと信じていたとは限らない。そして幼児が教えられた情報を誤っていると考えていても、社会的目標を優先することで情報に従っている可能性がある (Jaswal & Kondrad, 2016)。人に教えられた情報に従わないと、その情報が誤っていたとしても、他者に逆らったような印象を与えかねない。そのため、教えられた情報が誤っていると気づいていても、他者にいい印象を与えることや、悪い印象を回避することのために、その情報に従うことが考えられる。この仮説は Jaswal & Kondrad (2016) が理論的に指摘したが、実際の検討は行われていない。そのため、本論文では他者から繰り返し誤った情報が教えられる場面で、幼児がその情報は誤りだと気づいていても、他者に与える印象を考慮することで情報に従うか検討を行った。

第2章では他者からの誤った情報に従う傾向への他者の観察の影響について、研究1・研究2で検討した。まず研究1では幼児が教えられた情報を誤りだと考えていても、情報提供者である実験者に選択を見られていることで、その情報に従うか検討した。もし、幼児が情報に従わない選択をしても、実験者に選択を知られなければ、実験者の幼児に対する印象は変化しない。そのため、幼児が教えられた情報を誤りだと考えながらも、実験者に与える印象を考慮して情報に従うのであれば、実験者に自分の選択を見られていない場面では情報に従わず、正しいと思う選択をすると考えられる。一方で、幼児が教えられた情報の誤りに気づかず、正しいと信じて従っているなら、実験者に選択を知られる場面でも知られない場面でも、同様に教えられた情報に従うと考えられる。

実験では、色の異なる2つの箱の一方に隠されたシールを見つける課題を行った。初めに実験者が参加児には見えないよう一方の箱にシールを隠した後で、実際にはシールが入っていない箱にシールが入っていると教示した。そして、参加児が初めに選ぶ箱が情報に従った箱か、情報に

従わない教えられた箱とは逆の箱かを指標とした。参加児が情報に従い空箱を開けた場合は、もう一方の箱も開けてシールを見つけさせた。このように情報が誤りであったことを明らかにしながら繰り返し 8 試行行った。1 から 4 試行では全ての参加児に実験者の目の前で箱の選択を求めた。そして統制群には後半の 5 から 8 試行目でも実験者の目の前で選択を求めた。実験群には、6・7 試行では実験者の目の前で選択を求めた。一方で 5・8 試行では実験者がシールの入った箱の色について教示した後、退席し、参加児から見えない場所へ移動した。そして参加児には実験者が見ていない状態での選択を求めた。参加児がシールを見つけた後で、実験者は参加児の前に戻り、次の試行へ移った。

実験の結果、女兒の実験群では実験者に選択を知られる 6・7 試行で、実験者に選択を知られない 5・8 試行よりも誤った情報に従っていた。女兒の統制群では試行間に違いがなかった。男児では実験群でも統制群でも試行間で違いがなかった。この結果から、女兒は情報が誤りだと気づいても、実験者に与える印象を考慮して、その情報に従うが、男児では実験者に与える印象を考慮しないことが示唆された。また、実験者に選択を知られない場面でも、男児女兒ともに情報に従った選択がチャンスレベル程度に見られた。この結果には、実験者に選択を知られない場面でも、保護者が参加児に背を向けた状態ではあるが、同席していたことが影響していた可能性があった。つまり保護者が同席していたことで、参加児が保護者に選択を知られると感じ、実験者が不在の場面でも誤った情報に従った可能性が残った。

研究 2 では、研究 1 の結果を踏まえ、幼児が教えられた情報が誤りだと考えていても、情報を述べていない保護者に選択を知られることで、その情報に従うか検討することを目的とした。研究 2 では保護者が参加児の方を向いた状態で実験を行った。課題は研究 1 と同様の課題を行った。そして前半の 1 から 4 試行では、実験者も保護者も参加児を見ている状態で参加児に箱の選択を求めた。後半の 5 から 8 試行では、試行ごとに実験者が箱の色についての教示後、退席し、参加児から見えない場所へ移動した。そして参加児には実験者に見られていない状態で箱の選択を求めた。後半試行では、実験群では保護者と参加児の間のカーテンを閉め、保護者に参加児を見られていない状態で課題を行った。統制群ではカーテンを開けたまま、保護者に見られている状態で課題を行った。実験の結果、性別の要因で違いはなく、後半試行で、保護者に選択を見られている統制群の方が、見られていない実験群よりも情報に従う傾向があった。この結果から、男児でも女兒でも、情報が誤りだと考えていても、保護者に与える印象を考慮することで、その情報に従うことが示唆された。

第 3 章の研究 3 では実験者に与える印象が重要な場面と重要ではない場面を比較することで、他者に与える印象を考慮することが誤った情報に従う傾向に影響しているか検討を行うことを目的とした。幼児が他者に与える印象を考慮することで誤った情報に従うのであれば、他者に与える印象が重要な場面では、重要ではない場面より他者の印象を考慮し、誤った情報に従った選択をすると考えられる。そのため研究 3 では情報提供者である実験者からの印象が重要な場面では、重要ではない場面よりも誤った情報に従うと仮説を立て検討を行った。

実験では、研究 1・2 と同様の課題を行った。そして課題の前に、実験者に与える印象が重要な条件として、半数の参加児には実験者がいい子だと思ったら後でガチャガチャをさせてあげると教示した（いい子群）。半数の参加児には実験者に与える印象が重要ではない条件として、後でガチャガチャをさせてあげるとだけを教示した（統制群）。そして研究 3 では課題中一貫して実験者の目の前で選択することを求めた。保護者と参加児の間はカーテンで仕切り、保護者には一貫して見られていない状態で課題を行った。

実験の結果、統制群の方がいい子群よりも誤った情報に従う傾向がみられた。これは仮説とは逆の結果であった。そのため結果の要因は不明瞭だが、2 つの可能性が考えられた。1 つ目はいい子群が上手にシールを獲得できるほどいい子とみなされると解釈したことで、統制群よりも誤った情報に従わなくなった可能性が考えられた。2 つ目に条件付きでガチャガチャが出来ると教

示されたい子群よりも、無条件にガチャガチャが出来ると教示された統制群が、実験者のことをいい人だと好意的に捉えたことで、誤った情報に従いやすくなった可能性が考えられた。

第4章では研究1から3について総合考察を行った。まず、研究1と2の結果から、他者に選択を知られる場面で知られない場面よりも、誤った情報に従う傾向がみられた。そのため幼児は情報が誤っていると気づいていても、他者に選択を知られることで、その情報に従っていることが示唆された。研究3では、他者に与える印象が重要ではない群の方が重要な群よりも誤った情報に従う傾向があり、仮説とは一致しない結果であった。そのため、幼児が他者の印象を考慮して誤った情報に従っているという仮説は研究3では支持されなかった。また、研究2の誰からも選択を知られない場面では、教えられた情報と一致した選択がチャンスレベル程度であった。この結果からは繰り返し誤った情報を教えられたことで、情報が手がかりにならないと判断し、無視した選択をするようになった可能性が示唆された。

繰り返し誤った情報を教えられる場面で、幼児が情報に従い続ける要因について実験を行い検討した全ての先行研究は、幼児が認知的に未熟であるために、情報が誤っていることに気づけず、正しいと信じていることを前提としてきた。しかし、本研究の結果からはこの前提が不正確であり、繰り返し誤った情報を教えられる場面で、年少児がその情報が誤っていると気づいていることが示された。そして、誤りであると気づいていても、他者に与える印象を考慮することで、情報に従うことが示唆された。

Jaswal, V. K., Croft, A. C., Setia, A. R., & Cole, C. A. (2010). Young children have a specific, highly robust bias to trust testimony. *Psychological Science*, 21, 1541-1547.

Jaswal, V. K., & Kondrad, R. L. (2016). Why children are not always epistemically vigilant: Cognitive limits and social considerations. *Child Development Perspectives*, 10, 240-244.